

---

## 高田敬輔の仏画 ——「天下和順図」を中心に——

中澤菜見子(石川県立美術館)

---

高田敬輔(1674~1755)は、江戸時代中期に上方を中心として活躍した絵師で、闊達な筆遣いの山水画や、仏画を多く残したことで知られる。本発表で取り上げる「天下和順図」(以下、本作品)は、「釈迦・迦葉・阿難図」を中幅に、「耕作図」「山水図」を左右幅とした三幅対で、敬輔の菩提寺である浄土宗寺院・信楽院に所蔵されている。本作品は、浄土宗の根本経典である『無量寿経』のうち、とくに有名な「天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、国豊民安、兵戈無用。崇徳興仁、務修礼讓。」の文句に基づくとされている。また本作品は敬輔の法橋叙任以前の作であるが、先行研究では、敬輔は同じ主題の作品を仁和寺法親王のために描き、その功績により法橋に叙されたことが指摘されている。敬輔の仏画制作を考えるうえで重要な作品だが、図様の詳細な検討は未だ行われていない。

敬輔の仏画に関しては、「仏経の微妙の新図を写すを得る」(陸基章「敬輔画譜序」)などと称されていることが注目される。この「新図」という言葉については、従来ほとんど言及されてこなかったが、本発表ではその意味を作品の分析を通して明らかにする。例えば敬輔筆「八相涅槃図」(滋賀・浄光寺蔵)は法橋期の作品であるが、ここには蜂のような頭部を持つ人型の者など、従来は涅槃図に描かれない図様が描かれている。これは『大般涅槃経』において、釈迦の涅槃に際して招請された者たちのうちの一類「一切蜂王」と考えられる。このように、仏経経典に基づいて生み出された新たな図様が、「新図」として称賛されたのであろう。敬輔の伝記は、彼が仁和寺法親王や林丘寺二世、承秋門院といった貴顕に、仏画制作をもって認められていたことを伝えるが、それは、このような「新図」制作が評価されていたためではないだろうか。

本作品の主題である「天下和順」は、敬輔の師とされる画僧・明誉古磻の「大経曼荼羅図」(浄国院蔵)などに部分的に描き込まれているものの、主題としては他に例をみない。また、本作品の図様は古磻を踏襲せず、新しい表現をとっている。とくに、中幅の「釈迦・迦葉・阿難図」は、古磻の図様には登場しないが、経典中の「仏所遊履」の文句に対応し、三幅全体で、釈迦の遊行とその結果もたらされた理想的世界が図示されていると考えられる。「八相涅槃図」が従来の図様に「新図」を加えた作品であるのに対し、本作品は構想から敬輔の創意にかかる「新図」であり、法橋叙任の契機となるにふさわしい作品であったといえよう。本発表では、本作品と『無量寿経』の文句との対応関係を、義山良照『浄土三部経随聞講録』などを参照しながら確認し、また樹木や耕作図の部分にみられる京狩野家あるいは狩野派的表現をふまえ、敬輔がどのように「新図」を構成していったかを明らかにする。